

福島第一原子力発電所の事故から 1年で思うこと

柴田 誠一

Shibata Seiichi

(京都大学原子炉実験所 教授)



「改めて放射能の怖さを痛感した。しかし、日本という資源の乏しい島国において原子力発電は効率よく発電できる方法である。他のクリーンなエネルギーを開発するのももちろん重要なことだが、現状では原子力発電は有用な手段であると思う。事故によって明らかになった問題点を改善して、もっと安全な原子力発電を目指すという考え方はないのか。今回の出来事だけで、原子力＝危険＝停止すべきといった考え方は日本の国力を低下させることにつながりかねない。置かれた状況を冷静に考え前に進むことが大事だと思う。」「今回の事故は非常に残念であったが、一方で国民の省エネ意識を高め、世界的に自然エネルギーを利用した発電方法に関心の目を更に向けた。放射性廃棄物を長期にわたってどのように貯蔵あるいは処理すればよいか有効な手段もいまだ決まらず、事故を起こせば甚大な被害が生じ、このままでは決して安くない原子力発電が将来的に安定した電力供給源になるとはとても思えない。技術革新でコストの壁をクリアし多様な自然エネルギーを活用した電力供給を実現するとともに、原発を完全に廃炉とすることが私たちの使命だと思う。」

ここに引用したのは、昨年7月に大学院修士課程（工学研究科化学系）の講義「放射化学特論」終了時に提示したアンケート、福島原発事故について思うところを自由に述べよ、への回答例の一部要約である。受講者の約3割に当たる13名から意見が寄せられ、このうち原子力発電に関しては、廃炉を含めた否定的な意見が3名、万全な安全対策を立てた上で当面は運転継続を認めるという意見が5名、残りの5名は原子力発電の今後について直接には触れていなかった。事故後の対応、報道については批判的意見がほとんどであったが、ただちに原子力発電を止めるべきという意見は予想外に少なく、より安全なエネルギー生産へ発電方法の多様化が必要というものがほぼ共通の認識であった。講義の始めに確認したところでは、放射線、放射能、原子力については、ほとんどの学生が初めて聴講する内容だと答えている。人類はこれまで様々な科学技術を生み出してきたが、そこには必ずプラスの面とマイナスの面がある。マイナスをできるだけ抑えてより多くのプラスを引き出せるよう努力しなければならないのは当然のことで、そのためには基本的事項の正確な理解が求められる。今回は特に講義を通して教育の重要性を痛感した。

人類はこれまで地球上で生命活動を維持してきた生命体の中で唯一地球環境を変えうる科学技術を手にしつつある。生活に豊かさと便利さをもたらしてきた科学技術は一步間違えば我々を量り知れない危険にさらすことにもなることを肝に銘じておかなければならない。今回の福島第一原発の事故はこのことを改めて認識させてくれた。

スペースシャトル、国際宇宙ステーションから送られてくる映像で、現在では我々も容易に地球の美しい姿を見ることができるようになった。人類初の宇宙飛行士ガガーリンの「地球は青かった」の言葉に象徴される美しい地球、その地球を健全に保ち次の世代に伝えることは現代に生きる我々に課せられた責務である。